朝日新聞（夕刊）　新聞定価 朝夕刊月ぎめ 3,925円(本体価格 3,738円、消費税 187円)、1部売り(税込み)朝刊 150円、夕刊 50円　第3種郵便物認可

東海のハルキスト興奮

名古屋が舞台の村上春樹さん新作

新刊は名古屋が舞台だった——。今月12日に発売された村上春樹さんの小説「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」が、東海地方のハルキストたちを熱くさせている。月2回、村上さんの作品の読書会も開いているジャズ茶房「青猫」（名古屋市名東区藤が丘）で、愛読者4人に新刊の魅力を語ってもらった。

「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」

《あらすじ》　主人公の多崎つくると、高校時代の親友4人は名古屋市郊外の公立高校のクラスメート。親友たちは名字に色があり、「アオ」「アカ」「シロ」「クロ」と呼び合った。名古屋に残った4人に対し、色を持たないつくるだけが東京の工科大に進学したが、大学2年の夏に親友たちに絶縁されて、心に深い傷を負う。36歳になったつくるは恋人に促され、喪失感や孤絶感を乗り越えて自らの人生を取り戻すために、親友たちを訪ねる「巡礼の旅」に出る。

ついにきたか■保守性が効果的

愛読者4人 魅力語る

4人は、青猫で文学作品などの読書会を主宰する「猫町倶楽部」の代表・山本多津也さん(48)＝名古屋市＝、いずれも会社員の桂川大さん(40)＝同＝、榊原由加里さん(27)＝東郷町＝、カフェ店員の駒井寿子さん(31)＝瀬戸市。

山本さん以外は、猫町倶楽部の下部組織で、愛知県内を中心に約200人の会員がいる「ハルキ会」(通称)のメンバーだ。「ハルキ会」では月2回、村上春樹さんの小説やエッセーを読み、批評や感想を語り合う。

新刊の発売直後から、メンバーが投稿するツイッターやフェイスブックでも、「名古屋が舞台らしい」と話題になっていたという。

名古屋が舞台になった村上春樹さんの新刊について語り合うファン＝名古屋市名東区藤が丘

「予感はあった」。そう語るのは、桂川さんだ。「東京するめクラブ　地球のはぐれ方」（文芸春秋）というトラベルエッセーに、昭和区にある独特のメニューで有名な「喫茶マウンテン」が取り上げられたこともあり、取材の合間に東山動物園を訪ねたことをうかがい知るエッセーも読んだことがあった。「ついにきたか、という感じはありました」と熱っぽい。

巡礼の旅で、つくるが最初に訪ねたのは、アオの勤務先であるレクサスのショールーム。「名古屋城に近い」とあることから、桂川さんは「東区にある『レクサス高岳』じゃないか」と推測する。

アカのオフィスは「ショールームから五キロほど離れたところに」あり、「ガラス張りのモダンな商業ビルの、八階フロアの半分を占めている」と描写されている。榊原さんは「名古屋ルーセントタワーじゃないかな」と、想像した。

榊原さんは「つくるとは違って、外に出て行かなかった4人の特徴を描くのに、保守的な名古屋という地域性が効果的に働いている」と分析する。駒井さんが「名古屋は田舎過ぎず、それなりに豊かで出て行きたくない人は多いもんね」と続けた。

ファンの間では「新刊が『ノルウェイの森』(講談社)にも似ている」という印象を持った人も多かったようだ。

ただ、榊原さんは「ノルウェイの森が喪失の物語だったのに対し、新刊は回復の物語」と違いを分析する。

桂川さんは「3・11（東日本大震災）があり、作家自身も回復というテーマを意識せざるを得なかったのでは」と言う。山本さんは「ノルウェイの森が発売された1987年はバブル景気のまっただ中だったけど、経済が破綻(はたん)した今となっては、失ったものをいかに取り戻すかが大きなテーマにきたんじゃないかな」と付け足した。

ハルキ会では6月に新刊について語り合う読書会を予定している。問い合わせは、mixiコミュ文学サロン月曜会「HARUKI」(community.harukimurakami@gmail.com)へ。（小若理恵）

同じ市営住宅 連夜の不審火

中川区、計6件

24日深夜、名古屋市中川区春田2丁目の市営住宅「春田荘」で不審火が3件相次いだ。午後11時50分すぎ、3棟1階のエレベーター前で、ビニール傘が燃えているのを住民の女性が見つけて110番通報した。約5分後、駆けつけた中川署員が、約30メートル北東の8棟のゴミ置き場でもゴミ袋が燃えているのを見つけ、消火器で消し止めた。さらに、そこから約50メートル北西の2棟の1階掲示板のポスターが燃えた跡を、近くの男性が見つけた。春田荘では23日夜にも、ゴザや傘などが燃える不審火が3件相次いだ。同署が連続不審火とみて調べている。

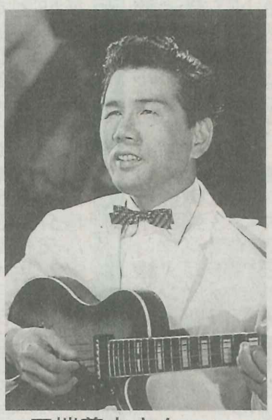
南区の病院も連続不審火か

17日以来2件目

25日午前7時45分ごろ、名古屋市南区南陽通5丁目、医療法人名南会「名南病院」の地下1階から出火、段ボールなどが焼けた。同病院では17日にも同様のぼやがあり、いずれも近くに火の気がないことから、愛知県警は連続不審火とみて調べている。けが人はいなかった。17日午前7時15分ごろにも、トイレ内でトイレットペーパーなどが燃える火事があった。

田端義夫さん死去 94歳

バタやん「十九の春」



田端義夫さん＝1965年ごろ

「大利根月夜」や「十九の春」など多くのヒット曲

盤工で家計を支えながら独学で歌とギターを身につけ

が低迷したが、63年に「島育ち」がヒット、紅白歌合

嘉栄昇作詞・作曲の「旅の終わりに聞く歌は」や「涙

デビューの前 庄内川で練習

田端さんは常々、「ぼくにはふるさとが三つある。松阪と名古屋、大阪」と言っていたという。名古屋は、歌手としての歩みを始

製のギターで指の運びを覚え、1938年には地元の素人のど自慢大会で優勝して上京。翌年「島の船唄」でプロデビューした。41年、22歳で名古屋市公会堂で初公演をし、「ふるさとに錦を飾ることができた」と喜んだ。97年3月に出したレコード「ふるさとの四季をうたう」には、故郷への万感の思いを込めた。中日劇場によると、歌謡ショーを過去に3回行い、最後は2005年4月の公演だった。